

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館研究報告別冊 no.005; はじめに :
報告書出版までの経緯と概要

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷, 凱宣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3428

はじめに

——報告書出版までの経緯と概要——

小 谷 凱 宣*

昭和59, 60年度の兩年度にわたり, 文部省科学研究費補助金(総合研究A)を受けた, 「ピウスツキ北方資料を基礎とする日本周辺北方諸文化の総合的研究」(代表者・加藤九祚)が実施された。ここでいう「ピウスツキ北方資料」とは, ㊤ポーランドの民族学研究者故プロニスワフ・ピウスツキが約80年前に主としてサハリン・アイヌの間で録音した旧式の録音蠟管, ㊦ピウスツキが執筆し, 既に出版されているモノグラフと雑誌論文, および, ㊧彼が残した未刊行草稿類をいう。本冊子は以上の諸資料の内容に関する諸研究の中間報告である。

本冊子の刊行にあたって, (1)本研究計画の背景, (2)二年間の研究活動の概要, (3)本冊子の内容, (4)今後の課題, および(5)資料の所在について, 簡単に記したい。

1. 本研究計画の背景

本研究の発端になったのは, 1977年に発表された A. F. マイエヴィチの短い報告である [MAJEWICZ 1977]。これは北海道大学文学部北方文化研究施設の紀要『北方文化研究』第11号に掲載された。マイエヴィチはこの報告のなかで, ポーランドのアイヌ文化研究者の名前を数人あげ, そのなかでも B. ピウスツキをとくにとりあげ, ピウスツキの刊行物, 未刊行の草稿類, そして, 最後に, 蠟管のことに触れている。蠟管がポーランドのポズナニ市アダム・ミツキエヴィチ大学言語学研究所に保存されていること, 箱の上書きから推定してサハリン・アイヌ文化を中心に, 種々の資料が録音されていると考えられること, さらに, 保存状態にも触れ, 適切な音の再生をするには新旧の録音・再生技術に通じた専門家の助力が必要であることなどを指摘している。

マイエヴィチの短報は, 日本の北方文化研究者に少なからぬ衝撃を与えることになった。その間の経緯は, 本研究の推進者の一人である黒田信一郎が独特の文体で既に記しているのので, それを参照していただきたい [黒田 1984]。

* 国立民族学博物館第一研究部

黒田信一郎、井上紘一らは蠟管を中心とする諸資料の総合的な研究計画をたて、その研究推進の母体として非公式な団体 CRAP (Committee for Restoration and Assessment of B. Piłsudski's Life and Works) を結成した。1981年にはマイエヴィチらとの文通により、日本とポーランドの間の共同研究推進の計画が立案され、現実の問題として協議され、国境を越えた研究組織の結成へと発展した。そこで研究推進の母体の名称も ICRAP と改称された。正式には International Committee for Restoration and Assessment of B. Piłsudski's Life and Works (ピウスツキ未刊資料復元評価の国際委員会) と呼ばれるものである。この組織は1982年秋に、日本側代表者加藤九祚 (現相愛大学人文学部教授) より、ポーランドのアダム・ミツキエヴィチ大学長と言語学研究所長にあてて結成を呼びかけた。

ICRAP の目的は、共同研究を両国の研究者の協力によって実施し、ピウスツキのすべての資料を探索・復元し、その内容の研究を推進することにあつた。特に、膨大な量になる未刊行の草稿類の探索と整理・復元は、ピウスツキの民族学研究における業績の全貌を明らかにするものであるが、それまで試みたものは誰もいなかった。草稿類はすべて手書きの原稿であり、見慣れない日本人の眼にはそれを判読してタイプ化するのは困難なため、国際間の共同作業が必要であつた。また、既刊のモノグラフ、論文類も広範囲にわたる学術雑誌類に発表されており、しかも発表演語も数ヶ国語にわたっているため、整理の必要が痛感されていた。蠟管はマイエヴィチが指摘したように [MAJEWICZ 1977]、保存状態が極度に悪く、最新の音声再生技術を駆使し、可能な限りの音声資料を再生する必要があつた。

当面の両国の共同作業として、具体的には、①日本にポーランドから研究者を招聘し、蠟管を持参してもらうこと、②蠟管の録音内容の再生は、日本で実施すること、③再生した音声資料はカセット・テープに録音し、蠟管とともにポーランド側に返却すること、および、④これからの共同研究の実施に必要な経費は日本側で負担することであつた。これにアダム・ミツキエヴィチ大学の関係者が同意する旨の意志表示をしたのは1983年春のことであり、これにより国際的な研究推進の組織ができあがつた。

この返事を受けて、日本国内の研究組織として、『ピウスツキ北方資料研究会』(代表者・加藤九祚) が結成された。加藤九祚 (当時国立民族学博物館)、黒田信一郎 (北海道大学)、井上紘一 (中部大学) らのメンバーによって運営協議会が結成され、その第一回の会合を1983年7月に国立民族学博物館で開催した。その後、第二回運営協議会を8月に北海道大学で、第三回を11月に同じく北海道大学で開催した。翌年の1984年4月下旬には、第四回運営協議会を国立民族学博物館で開催すると同時に、より多

くの研究者の参加を呼びかけて、第一回の研究会を開催した。

これと平行して、ポーランドの関係者との共同研究の具体的実現を目指して、国内の関係者は研究費の調達に懸命な努力を開始し、文部省、株式会社日本アイ・ビー・エム、財団法人放送文化基金などへの科学研究費補助金、研究助成金などの申請の準備がおこなわれた。

一方、「ピウスツキ蠟管」の存在を日本の研究者に知らせた A. マイエヴィチを北海道大学文学部北方文化研究施設に招聘すべく、日本学術振興会へ長期研究者招聘計画の申請もおこなった。（これは学術振興会の配慮で実現し、マイエヴィチは翌1984年5月より1985年3月まで北海道大学に滞在し、既刊の刊行物の整理、研究に従事するとともに、夫人とともに未刊行草稿類の整理にあたった。）

ICRAP の結成前後からポーランドの A. F. マイエヴィチは蠟管の国外持出し（日本への輸送）についての諸問題の解決にあたっていた。蠟管が約80年前に録音されたもので古文化財とみなされるため、持出しにあたってはポーランド国文化省の文化財保護に関する部局の許可を必要とした。マイエヴィチの精力的な折衝と ICRAP の計画の説明などにより、1983年6月にポーランド文化省は蠟管の日本への移送を許可し、たまたまポーランドに滞在中であった吉上昭三・井上絃一を日本側代表者として一時国外移送のための契約がおこなわれた。そして、最終的には、ポーランド国の税関にパッキング・リストの形で内容を明示したリストを残し、国外への輸送の許可がえられたのである。

蠟管の輸送には、梱包などのやっかいな作業を伴う。ポーランド滞在中の吉上昭三の努力と外務省、NHK、日本航空などの関係者の協力により、蠟管はパリ経由で日本に運ばれ、1983年7月に北海道大学に到着した。

2. 二年間の研究活動の概要

ピウスツキの草稿類は、マイクロフィルムの形で日本にもたらされた。その拡大複写に基づいて、昭和59年から60年にかけて、北海道大学において、E. マイエヴィチにより判読とタイプ化の作業が行われた。その作業の成果の一部として、サハリン・アイヌの祈りの言葉が A. マイエヴィチにより翻訳・編集され、刊行されている [PILSUDSKI 1984-1985a, b, c]。また、後に触れるように、草稿類はすべてタイプ原稿にされ、研究者の利用に供せる状態にある。

ピウスツキの既刊の論文類は、主として井上絃一により整理され、文献目録が作成された。これについては、次章で触れることにしたい。

蠟管の特質を考慮し、また、とくに「ピウスツキ蠟管」の保存状態のよくない現状を考慮するとき、蠟管からの音の再生作業は単純ではないことが予想された。幸いなことに、この研究計画の当初から北海道大学応用電気研究所の朝倉利光教授をはじめとする研究所のスタッフが参画し、1983年夏に到着した蠟管の音の再生作業が始まった。

音声の再生作業の開始とともに、関係者を中心に、国内の研究者を糾合して研究班の組織化が図られた。そして、音声再生の電子工学的研究とともに、録音内容そのものを対象とする言語学的研究、民族音楽学的研究、さらに、録音内容とその比較研究をおこなうための民族学的研究などの必要性が指摘された。かくして、「ピウスツキ北方資料研究会」のメンバーを母体にして、昭和59年度から二年間にわたる総合研究班が結成され、国立民族学博物館に事務局をおいて研究活動を始めることになったのである。

この研究班の正式のメンバーの一覧と各研究分担分野については、第1表を参照していただきたい。

この組織表に名前が載っていない多数の研究者の方にも、研究計画の推進の上でご尽力をいただいた。とくに、後に触れる研究会の折には、メンバー以外の方の出席をお願いし、質疑応答や討論に参加していただいた。また、国外の北方諸文化の研究者の方には、文通、論文の寄稿などの形で、種々の貢献をしていただき、国際的共同研究の実績を築いた。これらの方々は、岩井俊昭（当時北海道大学応用電気研究所、現静岡大学工学部）、宇田川洋（東京大学文学部）、大島稔（小樽商科大学短期大学部）、岡田宏明（北海道大学文学部）、岡田路明（白老アイヌ民族博物館）、萱野茂（二風谷アイヌ文化資料館）、北構保男（北地文化研究会）、切替英雄（北海道大学文学部）、A. クチンスキー（ポーランド、プロツワフ、ポーランド民族学会）、J. クライナー（ドイツ連邦共和国ボン大学）、佐々木利和（東京国立博物館）、佐藤知己（北海道大学文学部）、A. V. スモリャーク（ソヴィエト連邦科学アカデミー民族学研究所）、津曲敏郎（北海道大学文学部）、出利葉浩司（北海道開拓記念館）、徳永康元（関西外国語大学）、中川裕（千葉大学人文学部）、中村斎（北海道開拓記念館）、西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、灰谷慶三（北海道大学文学部）、萩中美枝（北海道教育庁）、J. バンチェロフスキ（ポーランド、アダム・ミツキエヴィチ大学言語学研究所）、A. F. マイエヴィチ（ポーランド、アダム・ミツキエヴィチ大学言語学研究所）、宮岡伯人（東京外国語大学）、安井亮平（早稲田大学文学部）、渡辺仁（早稲田大学文学部）などである。

次に、二年間における研究活動の概要を簡単に紹介しておきたい。

第1表 研究組織と各研究領域

研究代表者(総括)	加藤九祚 (当時国立民族学博物館, 現相愛大学人文学部)
工学的研究班	朝倉利光 (北海道大学応用電気研究所) 伊福部達 (北海道大学応用電気研究所)
言語研究班	池上二良 (札幌大学短期大学部) 田村すず子 (早稲田大学語学教育研究所) 村崎恭子 (北海道大学言語文化部) 浅井亨 (富山大学人文学部) 服部健 (元北海道教育大学) 藤村久和 (北海学園大学教養部)
民族音楽研究班	伊福部昭 (東京音楽大学) 谷本一之 (北海道教育大学札幌分校) 田村進 (東京音楽大学)
文学歴史研究班	吉上昭三 (東京大学教養学部) 沢田和彦 (新潟大学人文学部) 井上紘一 (中部大学国際関係学部)
民族学研究班	和田完 (小樽商科大学商学部) 大橋英寿 (東北大学文学部) 黒田信一郎 (北海道大学文学部) 小谷凱宣 (国立民族学博物館) 大塚和義 (国立民族学博物館) 荻原真子 (東京国際大学教養部) 伊東一郎 (早稲田大学文学部) 北構太郎 (帯広畜産大学) 佐々木史郎 (国立民族学博物館)

工学関係の研究は朝倉教授を中心に別個の文部省科研費等により実施され、その研究成果と情報は言語・音楽班に伝えるとともに、研究会の折に他の研究者にも提供してもらった。言語・民族音楽関係者、歴史・文学関係者は独自に研究を進めた。これらの成果と情報を交換し、全体の研究計画を推進するために、メンバー全員と他の関係者の出席する四度の研究集会と一度の国際シンポジウムを開催した。

研究会

全メンバーの出席する研究会は、昭和59年度には、4月、12月、2～3月に三度開催した。また、昭和60年度には最後の研究総括を兼ねて、2～3月に研究会を開いた。このうち、昭和59年度には、日本学術振興会の招聘で北海道大学文学部で研究に従事

していたA. F. マイエヴィチも研究会に参加した。また、昭和60年度最後の研究会には、A. F. マイエヴィチをポーランドより招聘し、研究会に参加してもらった。四回にわたる研究会の日程と概要は、つぎの通りである。

第1回 『ピウスツキ総合科研』研究会

昭和59年4月29日（日）、30日（月） 国立民族学博物館

第1日 加藤九祚：挨拶

黒田信一郎：事務局報告

村崎恭子：言語部門作業経過報告

井上絃一：ピウスツキ文献解題

第2日 加藤九祚：ロシア民族学派とピウスツキ

第2回 『ピウスツキ総合科研』研究会

昭和59年12月14日（金）～16日（日） 国立民族学博物館

第1日 加藤九祚：経過報告

朝倉利光・加藤九祚：来年度のシンポジウムの概要について

A. マイエヴィチ：『ピウスツキ著作集』の刊行計画について

黒田信一郎：ピウスツキ草稿類整理の進行状況

小谷凱宣：今後の研究計画について

朝倉利光：ピウスツキ録音蠟管の工学的再生

池上二良：アムール川下流域・樺太諸言語の研究とピウスツキ

第2日 井上絃一：ピウスツキの生涯とその業績

A. マイエヴィチ：ピウスツキの草稿類と若干のポーランド語論文について

徳永康元：ハンガリーに所蔵されている樺太資料について

村崎恭子：言語・音楽班の活動報告

田村すず子：北海道方言が録音されている蠟管について

藤村久和：ピウスツキ蠟管を聴いて

津曲敏郎：ピウスツキのツングース語関係資料

浅井 亨：蠟管と北陸地方

谷本一之：ピウスツキ録音以後のアイヌ音楽の時代的变化

萩中美枝：アイヌの口承文芸のジャンルについて

第3日 吉上昭三：歴史・文学班活動報告

小谷 はじめに——報告書出版までの経緯と概要——

吉上昭三：シェロシェフスキとピウスツキ

沢田和彦：日本におけるピウスツキの事蹟について

第3回 『ピウスツキ総合科研』研究会

昭和60年2月28日(木)、3月1日(金) 国立民族学博物館

第1日 朝倉利光：蠟管の工学的再生の現状

切替英雄：蠟管ラベル解説について

村崎恭子：大谷大学図書館所蔵の蠟管について

A. マイエヴィチ：ピウスツキ 1912年『アイヌ言語・フォークロア資料集』のための索引・辞典について

小谷凱宣：今後の研究計画

加藤九祚：ギリヤークとアイヌの熊まつりをめぐって

大橋英寿：アイヌのシャマニズム管見——沖縄との比較をとおして

佐々木史郎：20世紀初頭における樺太の民族関係について

荻原真子：アムールランド諸族の動物説話と獣婚譚をめぐって

第2日 池上二良：B. ピウスツキのオロッコ語資料——特にその採録テキストについて

大塚和義：サハリン郷土博物館所蔵のピウスツキ収集資料について

伊東一郎：ポーランド民族学史におけるピウスツキの位置

黒田信一郎：民族学とピウスツキ

第4回 『ピウスツキ総合科研』研究会

昭和61年2月28日(金)～3月2日(日) 国立民族学博物館

第1日 朝倉利光：トマス・エジソンと蠟管蓄音機

岩井俊明：レーザー・ビーム反射法による録音蠟管からの音声再生

伊福部達：蠟管音声の雑音軽減処理

池上二良：B. ピウスツキ採録のウイльта語テキスト

谷本一之：ピウスツキ蠟管に含まれる旋律のタイプ

第2日 井上紘一：「中央アジア・東アジア研究のためのロシア委員会」とピウスツキ

田村 進：ピウスツキの評価をめぐって

F. A. Majewicz: An Index to Bronisław Piłsudski's Materials of 1912; A Final Report.

伊東一郎：ピウスツキのバルト・スラブ民俗学への寄与

沢田和彦：ピウスツキと人肉事件

黒田信一郎：ピウスツキとシュテルンベルグ——民族誌の記述

第3日 渡辺仁：緊急調査の現状報告

小谷凱宣：出版計画について

- 1) 『ピウスツキ総合科研』総括の研究論文集の出版について
- 2) *Collected Works by B. Pitsudski* の編集・出版計画について

国際シンポジウム

昭和60年9月中旬には、北海道大学学术交流会館において、「ピウスツキ蠟管とアイヌ文化」の国際シンポジウムが開催された。これは北海道大学応用電気研究所の朝倉教授を委員長とする同シンポジウム実行委員会主催によるもので、カナダおよびアメリカ合衆国の蠟管資料の関係者とアイヌ文化を中心とする北方諸文化の研究者が一同に会して、技術的な諸問題や、言語・文化に関する諸研究を討議するものであり、海外からの研究者二十数名をふくめ国内の研究者も多数出席した。このシンポジウムは実質的には本研究班のメンバーによっておこなわれたものであり、本研究班としては、関係者全員の出席を呼びかけた。このシンポジウムの発表論文は、すでに実行委員会より刊行されている [COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM (ed.): *Proceedings of the International Symposium on B. Pitsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University (1985) を参照のこと]。

なお、このシンポジウムで発表した研究班のメンバーは浅井亨、朝倉利光、池上二郎、井上紘一、伊福部達、荻原真子、加藤九祚、沢田和彦、谷本一之、田村すず子、藤村久和、村崎恭子、和田完であった。それぞれの論文は、文末の文献目録に記載してあるので、参照していただきたい。

電子工学的研究は、朝倉教授をはじめとする北海道大学応用電気研究所のスタッフとその関係者により進められ、その間の研究の進展については別の報告書を参照していただきたい [朝倉・伊福部編 1986]。最初、伝統的な触針法でおこなわれた音再生の試みは、破損した蠟管には適用できぬことがわかり、改めてレーザー光を利用する、いわゆるレーザービーム反射法が開発された。この新方法は、回転板の改良を加えることにより、圧倒的に数量の多い古い円盤状レコードの音の再生にも応用できる可能性をもち、内外の注目を集めることになったのである [Iwai et al. 1985, 1986 を参照のこと]。

言語・音楽関係の研究者は、蠟管からの音の再生を待って、それを関係者に実際に聴いてもらい、その内容に接近する方法をとった。具体的には、蠟管からの再生録音を北海道各地に在住するサハリン・アイヌ、北海道アイヌの年輩の人々に自分の耳で聴いてもらい、それぞれの人の判断、評価を求める方法である。そのため、北海道各地に赴く必要があった。その会場は、札幌だけでなく、道南、道東にも及んだ。

歴史・文学の関係者は、主として東京で小研究会を開き、B. ピウスツキが北海道旅行したときのこと、および、ヨーロッパへの帰途半年ほど日本に滞在したときのことを中心に足跡を追い、彼の経歴、日本の文学者、社会主義者などとの関わりあいを明らかにした。そのため、彼の旅行先を尋ねる研究旅行もなされたのである。

3. 本冊子の内容について

本冊子はこの二年間の研究活動の中間報告であり、プロニスワフ・ピウスツキの悲劇的生涯に焦点を当て、彼の民族学研究者としての再評価を目指すことに重点を置いた。そのため本冊子の諸論文は、前述の国際シンポジウムの報告書 [COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM 1985] と同じ配列をとった。

第1章は「ピウスツキの生涯」にあてる。

まず加藤九祚論文は19世紀末から20世紀初めにかけてロシアで活躍したシュテルンベルグ、ボゴラス、ヨヘルソンらに焦点をあて、これら北方諸民族文化研究の先駆者の果たした役割とともに、19世紀後半のロシアの思想的背景について論じている。かれらはいずれも革命運動の途中で挫折し、流刑生活の経験者であることが共通している。のちにシュテルンベルグはギリヤークの調査で、ボゴラスはチュクチの調査で、ヨヘルソンはユカギール、コリヤーク、アリュートの調査で、それぞれ不朽の業績を挙げた。これらの研究者に比較して、ピウスツキはやや年齢が若い、革命運動に投じ、流刑の経験があるのは共通している。しかし、何がピウスツキと他の人々との間に民族学研究者としての世の評価に大きな差異を作ってしまったのか。加藤論文から、このことを読み取って頂けると思う。

本章の各論文の中で触れられているように、ピウスツキは学生時代に国王暗殺を計る陰謀に参画したという嫌疑で逮捕され、シベリア流刑に処せられた。十数年におよぶ流刑生活の間に少数民族文化に関心を抱き、刑期の終了後、サハリン（旧樺太）の少数民族の言語・文化を調査することになった。しかし、若い時期に学業半ばに流刑に処せられたことは、彼の後の経歴に大きな影響をおよぼすことになる。

さて、井上紘一論文は、ピウスツキが育った時代背景を考慮しながら、幼少期から

ギムナジウムをへて、ペテルブルグで逮捕されるまでを扱っている。故郷のリトワニアがロシア、ポーランドという大国の干渉により消滅し、冷酷な政治関係に流されて生きる運命を背負ったピウスツキの少年・青年時代、とくに逮捕される前後の事情が詳細に取り上げられている。

サハリンにおいて刑期を終了してから、ピウスツキは二度日本に立ち寄っている。はじめは短期間であったが北海道を旅し、さらにその二年後には日本に数カ月滞在したのちに、太平洋を横断してアメリカ合衆国を經由し、ポーランドに帰国した。この北海道旅行については吉上昭三論文が、日本滞在中におけるピウスツキの文学者、社会事業家との多彩な交流については沢田和彦論文が、それぞれ触れている。これらの論文により、ピウスツキと日本とのつながりが想像以上に強いことを理解して頂けよう。

第2章はピウスツキの学問的業績について論じる。

井上絃一による「ブロニスワフ・ピウスツキの業績目録」は、ピウスツキが民族学研究について執筆した著作をほぼ網羅したものである。このうち刊行物は、いままでに出版されたピウスツキの論文・モノグラフの出版目録であり、その執筆言語はポーランド語、ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語、日本語など多数の言語にわたっている。未刊の著作はピウスツキの死後も未刊行のままに残されていた草稿類の目録である。クチンスキ【本章参照】も指摘しているように、ピウスツキの著作に関する業績目録は今まで刊行されたことがなく、その意味で井上によるこの目録はピウスツキの学問的業績の全貌を伝える画期的なものといえる。特に、これらの目録の中には今回の総合研究を契機に整理され、初めて研究者に利用できるようになった資料も含まれていることを記しておきたい。

田村進、伊東一郎、クチンスキ（井上絃一訳）の諸論文は、ピウスツキがポーランドに帰国してから民族学研究に従事し、業績を挙げた諸分野のことについて論じたものである。そのうち田村論文は、ピウスツキのポーランドにおける比較音楽学的活動とその学問的意義を論じている。伊東論文はバルト海沿岸地域における民俗学的研究の推進においてピウスツキの果たした役割について触れている。さらに、クチンスキは、博物館を拠点として研究・調査活動に従事していたピウスツキが、民族学研究を目的とする博物館は、どのように組織され、どのように運営されるべきと考えていたのかを論じている。

また、大塚和義論文は、現在もサハリン郷土博物館に保管されている、ピウスツキにより収集された資料を紹介するものである。ピウスツキがサハリンでどのような活

動をしていたのか。彼の収集した資料を通して、私たちはピウスツキの活動の一端を理解できよう。

第3章では蠟管からの工学的音声再生とその録音内容について取り扱う。

蠟管は約80年前に録音されたのち、少なくともピウスツキ本人と他の2～3の研究者により音の再生が繰り返されていた。また、二つの世界大戦を経由しているために保管場所が何度もかえられている。

これらの事情のため、ピウスツキにより録音された蠟管が何本あったのか、言い換えれば、現存する蠟管六十数本がそのすべてであったのかどうかも不明である。近い将来、第二のピウスツキ蠟管が発見される可能性も残っていると断言してもよい。

蠟管はエジソン社など数社の製品が使用されている。管はやや厚めの紙のケースに収められており、ケースの上下の蓋には録音内容を示す記載がみられる。この記載がすべて録音者ピウスツキの手によるものと考えられている。しかし、のちの研究者が追加記載したものがないかどうかについては、現段階では判断の手掛かりがない。

さて、ピウスツキ蠟管は1983年7月に日本に輸送されてきてから、1986年2月に返送されるまで、北海道大学応用電気研究所に保管され、音声再生の作業がおこなわれた。A. MAJEWICZ [1977] の指摘にもあるように、蠟管素材の劣化という化学的変質と、かなりの数の蠟管の破損という物理的変質が観察された。

これらの蠟管に対する朝倉利光を中心とする音声再生作業は大きく二つに分けられる。第一は触針法によるものである。これは普通のプレーヤーのように、ある一定の重量をかけた針を直接レコード（蠟管）に接触させて音を再生する方法である。この方法は最も正統的であるが、適用可能な蠟管は保存の完全なものに限られた。破損した蠟管には適用できないのである。そこで、第二の方法として、針の代用にレーザー光線をあて、その反射光を電流に置換して音を再生する手法が開発された。岩井俊昭らによる論文は、この音声再生法の要点を紹介するものである。

このレーザー光線による音再生法は、潜在的に広い応用範囲をもつ。それは、この方法が「非破壊的に」音を再生する技術であるという特性に由来する。なぜなら、古い蠟管はすでにそれ自身が「古文化財」とみなされ、古文化財には物理・化学的変化を与えないで利用し、将来の利用に残すことが望まれるからである。レーザービーム反射法は、この古文化財取り扱いの原則に合致しているうえ、若干の技術的改良を加えれば、古い円筒型蠟管だけでなく、初期の円盤状レコードにも応用できる潜在性をもつ。結果的には、この再生技術が内外の関係者の注目を集めることになったのである [IWAI *et al.* 1985, 1986]。

切替英雄論文は、ピウスツキ蠟管のケースに記載されていた諸事項を詳細に採録・記述し、検討したものである。ここで特に触れておかねばならぬのは、蠟管の通し番号のことである。次の言語・音楽班による「録音内容」の記載にも見られるように、六十数本の蠟管には北海道大学応用電気研究所の朝倉利光教授のもとで通し番号が改めて付され、これが今回の研究活動では標準的な統一番号として使用された。この統一番号のほかにも、かつてポーランドのアダム・ミツキエヴィチ大学に保管中に既に付されていた番号、今回日本への輸送の直前に関係者により付された通し番号など、数種類の番号が存在する。切替論文では、これらの諸番号の関係が明瞭に理解できるように配慮されている。蠟管録音内容の検討には、必須の一覧表である。

村崎恭子を中心とする言語・音楽班の「ピウスツキ蠟管録音内容」は、現段階において、出来る限り忠実に、主としてアイヌ語の録音内容をローマ字表記（と日本語）で記載したものである。その記載には、理解のために必要な箇所には、楽譜を付してある。したがって、名実ともに、言語学者と比較音楽学者との共同作業の産物と言える。

六十数本の蠟管の内容は、村崎の序言にも触れられているように〔言語・音楽班の論文を参照のこと〕、アイヌ語北海道方言の作品が19篇、アイヌ語樺太方言の作品が53篇、日本語による作品が4篇、スラブ系言語の作品が3篇聴取された。雑音がひどく、全く聴取不可能の蠟管もかなりあり、最新の音声再生技術を駆使しても再生不能なほど、蠟管の材質劣化が進んでいたということが出来る。

谷本一之論文は、上の聴き取り難い録音蠟管から、サハリン・アイヌのメロディーを聴取し、その音楽的特質を論じたものである。とくにシベリア東部の少数民族の音楽との比較により、サハリン・アイヌの音楽学的な特徴が指摘されているのは興味深い。

第4章にはピウスツキの民族学的・言語学的研究と深く関わり合いのある諸論文を掲げた。これらは過去数年間にわたって実施してきた日本・ポーランド間の共同研究の成果の一部でもある。

池上二良論文、津曲敏郎論文は、サハリンの少数民族の言語のうち、ウイльта語とオルチャ語の特徴を扱ったものである。これらはピウスツキの未刊行の草稿類の中にあつた両言語に関する資料を参照したもので、本総合研究計画の推進によって初めて可能になった研究であるといえよう。それと同時に、未刊行の草稿類の中にサハリン島諸言語についての貴重な資料が多く含まれていることが如実に示されたといえる。

A. マイエヴィチらは、ピウスツキの主要モノグラフ、*Materials for the Study of the*

Ainu Language and Folklore [PIŁSUDSKI 1912] のなかのアイヌ語をカード化し、接頭辞と接尾辞、アルファベット順の語彙とそれぞれの語彙の出現頻度、アイヌ-英語索引（掲載ページ付き）、各語彙の逆索引、英語索引（掲載ページ付き）、文法事項索引に分け、ピウスツキの記載を利用し易くした [MAJEWICZ and MAJEWICZ 1986]。マイエヴィチの論文はこの索引の内容紹介である。

ピウスツキのサハリン少数民族の記載のなかには、病気とその治療に関するものが多い。和田完論文は、それらの記載のうち、出産とそれに関わる慣行に焦点を置き、医人類学の立場から検討を加えたものである。黒田信一郎論文は、ピウスツキによるハンセン氏病についての比較的詳しい記載に着目し、シュテルンベルグの記述をも参照しながら、ギリヤーク族がこの病気をどのようにとらえているかを論じたものである。特にシャマニズムとの関連を重視し、シャマンの活動を媒介に、ギリヤークの世界観の問題に接近するものである。

さらに、佐々木史郎論文は、今世紀初頭におけるギリヤーク族に関するピウスツキの論文を基礎に、北サハリンにおいて文化変容をとげつつあったギリヤークと他の集団、なかでもアムール川下流域のギリヤークとの関係を論じている。

第5章は、北海道およびサハリンのアイヌ文化の研究に当てた。

荻原真子論文、萩中美枝論文はともにアイヌの口承文芸に関するものである。そのうち荻原論文は、動物を主体とするアイヌの動物説話の形式を、北方狩猟民の説話と比較し、逆にそれをアイヌ文化における顕著な狩猟民的特徴の一つとして論述するものである。また、萩中論文は、北海道とサハリン・アイヌにみられる口承文芸の一形式オイナの形態的特質を論じたものである。これらの論文は、ピウスツキ蠟管内容の比較研究を将来進める際の貴重な指針になるべきものである。

スモリャーク論文（灰谷慶三訳）は、サハリンにおけるアイヌ、ニブヒ、ウルチとアムール川下流域の諸民族との接触について概観したもので、古い時期の仮説の誤りを最近の研究成果に基づいて訂正するなど、アイヌを中心にみた諸民族間の接触を豊富な文献資料を駆使して論じたものである。

最後の J. クライナー論文は、ソヴィエト連邦と東欧諸国を除いたヨーロッパ各国に現在所蔵されているアイヌの諸資料について論じたものである。これは西ドイツのボン大学日本研究所で数年前からおこなわれてきた研究計画の中間報告的なもので、この内容の一部は昨年（1985年）9月に、北海道大学における国際シンポジウムの折の特別講演において紹介されている。

広く知られているように、アイヌ民族とその文化は学説的にみて世界の人類学・

民族学研究者の注目を集めてきており、ヨーロッパ、北アメリカの研究所、博物館にはかなりのアイヌ文化に関する資料が所蔵されている。しかし、具体的にどの研究機関に、何が、どれだけ所蔵されているかについては何の情報もなかった。

西ヨーロッパという地域は限定されているにしても、クライナー論文により明らかにされた実態は貴重である。一口に言えば、これは西ヨーロッパにおけるアイヌ民族・文化の研究史である。そして、この種の資料集大成は、新たな研究の飛躍のためには必要不可欠であり、クライナー論文が日本の北方文化研究に示唆するところは大きいと思う。

4. 今後の課題

以上のような経過と内容の本冊子は、ICRAP とその国内研究組織の「ピウスツキ北方資料研究会」のメンバーが中心になって推進してきた研究活動の中間報告である。当初の目標であった「ピウスツキ蠟管」からの音声資料の再生が終わり、再生テープに基づいて録音内容の概略がわかってきた。もちろん、上に触れたように、音声再生技術の駆使にもかかわらず、再生不能なほど材質劣化の進んでいた蠟管が予想以上に多かったことも事実である。

「ピウスツキ北方資料」、日本周辺の諸民族文化に関する諸資料などを考慮しながら、当面の研究課題について簡単に触れておきたい。

(1) 蠟管録音内容の比較研究

ピウスツキ蠟管の録音内容は、村崎恭子らの報告に示されているように、今ようやくその全体像が明らかにされたばかりである。聴取できた蠟管の数は、断片的なものを含めると、かなりの数におよんでいる。すべての蠟管には材質劣化に起因する雑音が激しく、録音内容を正確に聴取し、転写することは多大な困難をとまなう。しかしながら、さらに聴取の努力を払い、可能な限り内容を明らかにする必要がある。

これと平行して、蠟管の音声内容の比較研究が必要である。サハリン・アイヌ文化に関する公表された文献資料が少ないことは事実であるが、蠟管録音内容にはいままで未知であった事柄も多く含まれている。それらは改めて比較研究を行う必要がある。また、今回の総合科研の期間中には、ピウスツキの未刊行草稿類の内容と録音音声資料の内容との対比を行う時間的余裕がなかった。これも、今後に残された課題である。

(2) 『ピウスツキ著作集』の編集・刊行

ピウスツキの既刊および未刊の業績類をふくむ諸資料を編集し、現時点における学

術的意義・評価を付した『ピウスツキ著作集』の出版が必要である。現在のところ、井上紘一とA. マイエヴィチによりこの出版が計画されている。

この計画は全巻6冊からなり、概要は次の通りである。

『ピウスツキ著作集』(*Collected Works of Bronisław Piłsudski*)

第1巻 『サハリンの原住民文化：既刊論文，1898年～1936年』

第2巻 『サハリンの原住民文化：ロシア語，ポーランド語，日本語等既刊論文翻訳』

第3巻 『アイヌ語および口頭伝承研究資料 [*Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, 1912]』

第4巻 『未刊草稿類 I：オルチャ，オロッコ言語学，アイヌ祈禱文』

第5巻 『未刊草稿類 II：アイヌ民族学と蠟管』

第6巻 『雑綴，評価，索引』

(3) 日本国内にあるアイヌ文化に関する諸資料の集大成

一般的に言えば，ある民族・文化に関する資料には，文献資料，映像資料，音響資料，標本資料（物質文化）が含まれる。文献資料とは，論文，単行本など活字で表わされた資料である。映像資料にはフィルム（映画，スライド，スチール写真など），絵画，ビデオが含まれる。音響資料は，蠟管をふくむレコードと音声テープがある。また，標本資料には，いわゆる道具類とそれらを作るための素材が含まれよう。これらの資料は研究推進のための基礎的資料である。「ピウスツキ北方資料研究会」を主体とする本総合科研では，ピウスツキ個人が残した諸資料の集成を図り，研究者の利用に供せるよう配慮してきた。

上のような観点に立つとき，クライナー論文 [第5章参照] は日本の北方文化研究者に多くのことを示唆している。とくに世界の人類学，民族学界においては，アイヌ民族およびアイヌ文化は長く研究者に関心を持たれてきた。日本国内各地に保存されている北方諸民族文化，とくにアイヌ文化に関する諸資料を集大成し，いままでの研究史を回顧し，今後の研究の指針をえることは，日本の北方文化研究者の義務ではなかるうか。

5. 資料の所在

最後に，関心ある研究者の方々の利用の便を考慮して，本総合研究において使用した諸資料の所在，保存場所について簡単に紹介しておきたい。

蠟管のオリジナルは，現在，ポーランド国ポズナン市アダム・ミツキエヴィチ大学

言語学研究所に、再生された音声テープとともに保管されている。日本においては、蠟管の複製と音声再生テープは北海道大学応用電気研究所朝倉利光教授研究室に保存されている。さらに、テープの複製は、本研究計画の言語・音楽班のメンバーも研究資料として各自保管している。

既刊モノグラフ・論文類と未刊行草稿類の原本はポーランド各地の図書館、大学、研究所に散在していたが、そのほとんどはマイクロフィルムで日本にある。その複製は北海道大学文学部北方文化研究施設、中部大学国際関係学部井上紘一研究室、および国立民族学博物館図書室にそれぞれ所蔵されている。また未刊行草稿類は、マイエヴィチ夫妻の努力により原語のままタイプされ、利用し易くなっている。その複製も北海道大学文学部北方文化研究施設、中部大学国際関係学部井上紘一研究室、国立民族学博物館図書室に保管されている。

謝 辞

一連の研究活動の実施にあたっては文部省科学研究費補助金（総合研究 A）（代表・加藤九祚）のほかに、「ピウスツキ録音蠟管の工学的再生」（試験研究 1, 代表・朝倉利光）、財団法人放送文化基金からの委任経理金「古蠟管音声再生に伴う雑音除去」（代表・伊福部達）および「カラフトアイヌ音声・画像資料の記録と録音」（代表・村崎恭子）、株式会社日本アイ・ビー・エムからの委任経理金「B. ピウスツキ録音蠟管に録音された情報内容の言語学および民族音楽学的解析の研究」（代表・黒田信一郎）、「B. ピウスツキ録音蠟管に録音された情報の音響工学的再生および複製の研究」（代表・朝倉利光）、「B. ピウスツキ録音蠟管の情報に関連する資料の整備・分析と蠟管情報の比較研究」（代表・加藤九祚）、および実藤美枝氏、長谷川文彦・みどり両氏らからの委任経理金を直接間接に使用させていただいた。また、日本学術振興会をはじめとする各機関からは、本研究の遂行にあたり、多大な援助をいただいた。さらに、北海道大学をはじめ、研究分担者の所属する各大学・研究機関の関係者には大変にお世話になった。ピウスツキ蠟管の輸送にあたっては、外務省、NHK、日本航空の関係者の方々からご援助をいただいた。この報告書の初めにあたって、これらの諸団体、個人の方々に厚くお礼を申しあげたい。

本冊子刊行に際しては、梅棹忠夫館長をはじめ、編集委員会のメンバー、とくに竹村卓二、中山和芳、八杉佳穂の諸氏からは種々の助言をいただいた。厚くお礼を申上げる次第である。最後に、本稿の執筆にあたっては、黒田信一郎、井上紘一、佐々木史郎の諸氏からは資料の提供を受けたほか、多くの助言を受けた。また、編集作業の過程において、大阪外国語大学の村上奈美枝、橋本吉史、上原裕司の諸氏の助力をえた。

文 献

- ASAI, T.
1985 The Ainu Prayers and *Iso*. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 151-156.

朝倉利光・伊福部達（編）

1986 『ピウスツキ録音蠟管研究の歩み：昭和58年～61年』札幌：北海道大学応用電気研究所。

BANCZEROWSKI, JERZY

1985 On Discovery and First Attempts at Rerecording B. Piłsudski's Ainu Phonographic Materials. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 10-19.

BANCZEROWSKI, J. and A. F. MAJEWICZ

1985 Toward a Restoration of Bronisław Piłsudski's Scholarly Bequeathal. *Institute of Linguistics Working Papers* 14. Poznan: Adam Mickiewicz University.

COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM (ed.)

1985 *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*. Sapporo: Hokkaido University.

IKEGAMI, JIRO

1985 B. Piłsudski in Uilta and Olcha Studies. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 168-172.

INOUE, KOICHI

1985 A Brief Sketch of Br. Piłsudski's Life. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 1-9.

IWAI, T., T. ASAKURA, T. KAWASHIMA, and T. IFUKUBE

1985 Reproduction of the Sounds from Old Phonographic Wax Cylinders by Using the Laser-Beam Reflection Method. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 66-72.

IWAI, TOSHIKI, TOSHIMITSU ASAKURA, TORU IFUKUBE, and TOSHIO KAWASHIMA

1986 Reproduction of sound from old wax phonographic cylinders using the laser-beam reflection method. *Applied Optics* 25(5): 597-604.

KATO, KYUZO

1985 O Merakh Predlozhennykh B. O. Piłsudskim dlia Pod'ema Zhiznennogo Urovnia Narodov Sakhalina. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 225-227.

KAWASHIMA, T., T. IFUKUBE, T. ASAKURA, and H. AOYAMA

1985 Development of a Wax Cylinder Machine and Reproduction of B. Piłsudski's Records by Using the Stylus Method. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 55-60.

黒田信一郎

1984 “ピルスズキさんの蓄音機” 『月刊みんぱく』8(3): 15-17。

MAJEWICZ, ALFRED F.

1977 On B. Piłsudski's Unpublished Ainu Material. 『北方文化研究』11: 83-94.

MAJEWICZ, ALFRED F. and ELZBIETA MAJEWICZ (Compilers)

1986 *An Ainu-English Index-Dictionary to B. Piłsudski's "Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore" of 1912*. Poznan: Adam Mickiewicz University.

MURASAKI, K., H. KIRIKAE, and H. FUJIMURA

1985 The Task of Interpreting the Contents of the Piłsudski Recordings. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 73-77.

OGIHARA, SHINKO

- 1985 The "Animal Myths" of the Ainu and the Peoples of the Sakhalin and the Amur-Basin. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 228-235.

PIŁSUDSKI, BRONISŁAW (TRANSCRIBED and EDITED by ALFRED F. MAJEWICZ)

- 1984-85a Ainu Prayer Texts I. *Institute of Linguistics Working Papers* 10. Poznan: Adam Mickiewicz University.
 1984-85b Ainu Prayer Texts II. *Institute of Linguistics Working Papers* 11. Poznan: Adam Mickiewicz University.
 1984-85c Ainu Prayer Texts III. *Institute of Linguistics Working Papers* 12. Poznan: Adam Mickiewicz University.

SAWADA, KAZUHIKO

- 1985 B. Piłsudski in Japan. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 20-23.

TAMURA, S. and H. NAKAGAWA

- 1985 Hokkaido Ainu Songs in the Piłsudski's Recordings. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 108-116.

TANIMOTO, KAZUYUKI

- 1985 A Study on the Process of Chronological Changes in the Music of Sakhalin Ainu Recorded by B. Piłsudski. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 78-85.

WADA, KAN

- 1985 B. Piłsudski's Works in the Medical Anthropology. In COMMITTEE FOR THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM, ed., *Proceedings of the International Symposium on B. Piłsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Sapporo: Hokkaido University, pp. 240-243.